五代教主作 灰釉茶盌 銘「翁」

平成23年(2011)

阿づまの光

11月号・Novembro

題字 出口直日

通巻 第512号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL(IP) 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
http://www.oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

身の垢は湯水石鹸であらへども
洗ひがたきは心なりけり

出口王仁三郎聖師

人型おすすめのご用を共々に

総務管理課長 木村 茂

十一月を迎え、来年の節分に向かって活動をスタートされている方もいらっしゃることでしょう。神さまからいただいている大切なご用である「人型おすすめ」の季節です。

多くの皆さんがこの時期からはじめられるのではと思いますが、本年は特に、東日本大震災、福島第一原子力発電所事故による放射能汚染をはじめ西日本の台風被害等幾多の災害の発生した年になりました。被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願ってやみません。

過ぎし一年間の罪、汚れをしっかり祓い、次の一年の無事を願う大祓の神事は、まことに意義深いものであります。この一年どうか世界や日本そして個人のわざわいを、大難を小難に、小難を無難にと願い、人型のおすすめ活動に努めたいと思います。

二十五年ほど前「全国人型おすすめ活動の日」に口丹波主会青年部の一員として、初めておすすめに廻りました。天恩郷付近の住宅地のインターホン越しでのやり取りで対面も叶わない中、百軒以上訪問して一軒受けていただけるというあり様の修行をさせていただきました。今は当時以上に厳しい状況の中、新規にお受けいただけるのが難しくなりました。事前に配布する人型宣教チラシの活用や、友人・知人への手紙によるおすすめなどが有効な方法と思われます。

大本ではご神業は機のご用に例えられ、人それぞれに使命をいただいており、一人ひとりのハタラキで、少しずつ全体の機の模様ができていきます。どんな模様になっているのかは、振り返って見ないと分かりません。一人ひとりがその時その時のご用を精いっぱいしていれば、素晴らしい模様の機が織れると教えられています。そのご用のなかで平等に与えられているのが人型おすすめではないでしょうか。

本部では、人型おすすめ活動の本年度重要課題として、一人三百体以上のおすすめ・後継者の育成・おすすめ地域の開拓などが示され、結果として実績十%増を目指しています。

気持ちを引き締め、勇猛心を発揮して、おすすめ活動に共々がんばりましょう。

第103回「21世紀、生きがい講座」より

人はなぜ生まれたのか③
ほんとうの修行

講師 成尾 義
（東京宣教センター
愛善宣教課主幹）

命を如何にまっとうするか

大本では、〝しゅぎょう〟のことを、行いを修める「修行」と示されています。一般でいう山にこもったり、断食をしたり、火の粉の上を歩くというような業を修める〝修業〟ではありません。

では、私たちの「修行」とはどういうものなのか、考えてみたいと思います。

まず、私たちこの世に生をうけたものは、必ず死を迎えます。その生涯はみな様々で、長寿の人もあれば幼くして亡くなるお子さんもいらっしゃり、最期の瞬間まで、それぞれに現界での人生があります。

私事ですが、昨年の十一月に父を亡くしました。八十五歳の生涯でしたが、五十代のなかばから様々な病を患いました。特に還暦を迎えたころには肺がんを患い、医師から余命三ヵ月と宣告されました。

私は、その宣告を聞き大変ショックを受けました。またそれと同時に、病気ばかりを繰り返しながらも、信仰第一に生きていた父と、大本の神さまに対して疑念を抱きました。

ところがです。なかば諦めで行った手術が成功し、医師も「奇跡としか言いようがない」と驚くほどのご神徳をいただきました。そして私はというと、神さまや信仰に疑念を抱いたことに対して、深く反省することとなりました。

父はその後も脊髄性筋萎縮症という難病を患いました。しかしどんな状況下にあっても、ひたすら神さまにおすがりしながら前向きに生きる父から、信仰者としてのあるべき姿を学ぶことができました。

大本では、人は神さまから命を授かり、この現界でそれぞれの使命をまっとうしたら、魂の故郷である天国へ復ると教えられています。

ですから、この命を如何にまっとうするのかがとても重要になるのです。

出口王仁三郎聖師は、『常に、祭（政）教慣造の進歩発達を祈願し、かつ完全せしむるを以て、人たるものの天職』と示されています。

神さまからいただいた生命の中で、人として守るべきものを発達させて、正しいことを踏み行わせていただくということです。

この「祭・教・慣・造」のことを、大本では「四大綱領」と教えられています。

祭―惟神の大道

惟神は、神さまのみ心のまにまに、という意味です。

祭と言いますと、一般では神田祭や祇園祭といった神輿や山車を担いだりひいたり、夜店が出たりといったお祭事をイメージされますが、大本では「祭」のことを〝まったく釣り合うこと〟と説かれています。つまり天秤の左右が釣り合うように、神さまのみ心と私たちの気持ちが等しく釣り合うことが「祭」なのです。

この「祭」には「顕斎」と「幽斎」という二つの方法があります。

「顕斎」は形に表れるもので、神さまをおまつりするお宮があって、お掃除をして神饌物を供えたり、お灯りをともしたり、装束に着替えて作法に添って柏手を打ち、祝詞を持って奏上するなど、形に表現することを言います。

次の「幽斎」とは隠れているもの。つまり目に見えないもので、根源神（至高者）に対する感謝や願い、希望といった私たちの気持ちや思いを指しています。

大本では、「顕斎」を〝祭るの道〟「幽斎」を〝祈るの道〟と説き、この「顕斎」と「幽斎」がまったく釣り合うようにと教えられています。

これは神さまとの関係だけに限ったことではありません。人と人、生活のいろいろな所でもこの真釣り合いが重要になります。家庭、学校、職場、ご近所、さらには自然環境など、この釣り合いが崩れてしまうと、たちまち私たちの生活はおかしくなってしまうと言っても過言ではないのです。

この現界では、私たち人間が神さまに代わって、現界の発展を進め拓いていくことが、使命の一つでもあります。お出会いする人たちと仲良く親しみ、にぎみ合って、共々にまつりあって、努力精進していくことが大切です。

教―天授の真理

大本で説く教えとは、〝緒を強うる〟、矯正することです。この〝お〟は魂の緒で霊魂のことです。『魂の緒を強うる』のが『教え』であって、決して数学や歴史、科学といったものではありません。

私たちは、神さまから一人に一つずつ、命という名の魂をいただいています。

そしてこの魂には、一霊四魂の働きがあります。（次頁図参照）

一霊とは「直霊」と言い、四魂は「荒魂・和魂・幸魂・奇魂」の四つのことを言います。

この一霊の直霊は、直日とも言い、省みる力が備わっています。この直霊が正しく働き省みることができると、荒魂は勇気や奮起といった前向きな力が発揮し、和魂は親和や平安といった力が、幸魂は愛のはたらきがあり、ものを生み進化させ育てる力が、そして奇魂は知恵が豊になり、巧みに物事に取り組むことができ、観察力が増して悟ることができるようになります。

しかし、この一霊が省みる力を発揮できなくなると、直霊が曲霊となって我良しな

働きを引き起こし、荒魂は争魂になって私欲のために争いを好み、粗暴な性格になります。和魂は悪魂になって悪いことを好み、不平不満を募らせます。また幸魂は逆魂になって天地を畏れることを忘れ、物事に対して逆らうようになります。そして奇魂は狂魂になって、善悪の区別がつかないようになり、まさに人として進むべき道を誤ってしまいます。

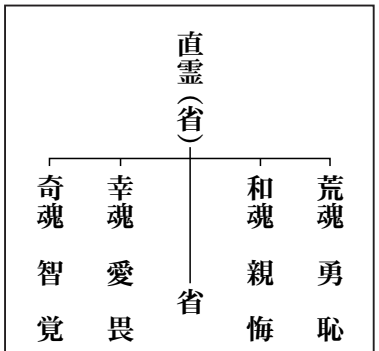
ですから、私たちは一霊四魂が正しく働くように、日々の言動を省みて、魂の緒を矯正することを心がけなければなりません。

しかし、一言で省みると言いましても、実際のところなかなか難しいです。

幸い大本には天授、神さまから授けられた真理である、『大本神諭』と『霊界物語』の二大教典、また歴代の教主・教主補が記した神書があり、それらを拝読することで、普段の生活態度を振り返ることができます。

また尊敬できる上司であったり、同僚であったり、後輩でもいいでしょう。周囲の人の長所を見て学ぶことで、自分の言動を省みることができます。

学ぶという言葉は、「真似ぶ」から派生していて、人の言動を真似ることからきていると言われています。



『真似をせよ良き真似をせよそのうちに自分のものになりてくるなり』

とは、出口日出麿尊師の短歌ですが、良い真似をすることによって、いつのまにか自分のものになることができるのです。

さらに師を仰ぐお稽古事を習うこともいいでしょう。師匠と弟子ははっきりとした縦の関係であり、師の指導を仰ぎ、真似をし教わることで、自分自身の立ち居振る舞いや言動などを省みることができます。

慣｜天人道の常

「慣」とは慣性や習慣という意味です。

私たちが暮らす地球は、太陽が昇って朝になり、沈んで夜になります。また春夏秋冬、毎年変わることなく季節が巡ります。これが地球の慣性であり、習慣です。

同じように私たち人間も習慣をもって、この世の中を良くしていかなければなりません。この習慣は、いろいろなところに存在します。

例えば、この東京本部（東京宣教センター）で言いますと、第二日曜日にお月次祭が執り行われていますが、その前日の土曜日には当番で直心会と誠心会の皆さんがお掃除のご奉仕に来てくださいます。また月次祭当日は、青年部が参拝席の準備をしたり、立松売りやコーヒーバザーをしたり、青松会の皆さんが場内整理のご奉仕をされています。これが東京本部の一つの慣であります。

また私の自宅がある亀岡市の町内の習慣で言いますと、夏休みの最終日曜日には、小学校のグランドの除草作業や通学路の大掃除などがあります。これも一つの慣わしで、参加・貢献することによってご近所づきあいができ、信頼関係も生まれます。

もしも私や家族が、大本の神さまのご用にのみ取り組んで、町内の行事や催しを無視し続けると、私たち家族の信用を失うだけでなく、どんなに大本が素晴らしいところであっても、一つも理解してもらえないと言っても過言ではありません。

私たちは一人では何もできません。様々なところにある習慣を大切にして、皆さんと支え合って生活することが大切です。

造｜適宜の事務

造とは生業を通して、世のため人のために、善事を造り出していくことです。

皆さんそれぞれのお仕事、活動が神さまのご用につながっているのです。

私は今、東京本部の職員として奉職していますが、皆さんもそれぞれにご縁があって、自身の生業にお仕えになっています。その生業を通じて、世のため人のために貢献させていただくことが、人生においての大きな役割なのです。

これは単に職業として働くことだけを指しているのではありません。社会活動にご奉仕することも、主婦としてご主人を支え、育児に励み家庭を守ることも、定年退職してお孫さんの面倒を見ることなども造であり働きなのです。もちろん、神さまのご用に励むことも立派な造であります。

一日々々を大切に過ごす

『どの修行が辛いといっても、人と人との和をはかる修行ほど辛いものはないでしょう。

なぜなら、人間の気持ちほど複雑で難しいものはないからです。

滝に打たれるような修行も、修行には違いないでしょうが、いわば、自己満足のようなものがふくまれてはいないでしょうか。ほんとうの修行とは、やはり日々の生活の中にあって、反省し、己と闘い悟ってゆく絶えざる前進への努力だとおもいます』

（出口直日三代教主著「寸葉集」巻二）

生きていればいろんな目に遭います。良いこともそうでないことも。このたびの東日本大震災もそうです。

私たちは生涯を通して、うれしいこと、楽しいこと、悲しく辛いこと、悔しいことなど、色々な目に遭い体験しながら、それでもしっかりと前を向いて、周りの人との和合を図りながら、常に省みつつ一日々々の生活を努力して、築き上げていかなければなりません。

そして、地域の人たちとつながり、日本の伝統や文化、感性を大事にしながら、日本人としての誇りを持って、それぞれの立場でできるご用に励ましていただくこと。それが、私たちが現界に生を受けている本当の意味であって、大本で教えられている地上に天国『みろくの世』を築くことにつながるのです。

秋季東光苑祭式講習会

東光苑秋季祭式講習会は、九月二十四・二十五日の両日、東京本部を会場に開催され、受講者六十人と講師・助教五人が参加した。

受講者は、初級クラスが基本動作・後取動作・正中動作・祓式行事・月次祭まで、中級クラスが大神鎮座祭・祖霊鎮祭・庭上祭・結婚式まで、特別クラスが葬祭の斎主養成をそれぞれ実習したほか、夜間には親睦会が催された。

なお、初級と中級クラスの受講者は、最後に大本祭式認定試験に臨み、二日間の実習の成果を試した。

祝詞後取の動作を実習する初級クラスのみなさん

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は十月九日、午前十時三十分から、斎主・佐藤暉枝氏のもと執行され、四百人が参拝した。

祭員は関東教区直心会員、少女祭員は東京主会の吉田英里香さん、伊藤奏流くん、神奈川主会の星田夏音さん、田中綾乃さん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は周藤ヒデ子直心会群馬連合会長、添釜は中村社中のみなさんが担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、東日本大震災の引き続いての支援をお願いすると共に、日本国内で出る残飯を例に挙げ、生活のあり方を見直すことの大切さを説いたほか、九月一日付で発令された機構改革や来年度の東京本部・東京宣教センターの活動について紹介。「東京宣教センターは首都圏宣教を、各主会は分所・支部の活性化を図り、一人ひとりがみ教えの実践リーダーとして、心を一つに外に内に向かって大本の教えを取り次いでいかなければならい」とのべた。

直会後、二階講座室では関東教区青松会主催による「第四回元気の出る研修会」が、八階ミーティングルームでは「主会長連絡会議」がそれぞれ開催された。

祭員ご奉仕の直心会と少年部のみなさん

第20回家庭平安祈願祭

今年で第二十回目を迎えた家庭平安祈願祭は、十月十五日午前十時三十分から、斎主・和田桂一祭務課長のもと執行され、六十八人が参拝した。

祭典では、斎主と祭員三人が全国各地から申し込まれた六百一世帯の世帯主名を読みあげ、全世帯の平安と弥栄を祈念した。

祭典後、森良秀東京宣教センター次長があいさつに立ち、東日本大震災を踏まえながら家族や人々の絆の大切さについて紹介。「私たちは真の神さまのご守護の元で家族の絆を深め、それぞれの家庭から良き型が出せるよう努めねばならない」とのべた。

なおご祈願は、十月二十一日までの一週間続けられた。

斎主と祭員が申込世帯主名を奏上。続いて参拝者全員が玉串を供えた

第104回「21世紀、生きがい講座」

第一〇四回『二十一世紀、生きがい講座』は十月十九日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、成尾陽亀岡宣教センター・メディア愛善宣教課長を講師に「日本人と〝はらい〟と〝お守り〟―目に見えないものを尊ぶ生活」と題して開催された。

参加者は三十四人（内、一般四人）。

講座では、作家・司馬遼太郎氏の論文や出口王仁三郎聖師のご教示を用いて、日本人の精神性の高さを紹介したほか、人間が生かされていることの意味、食事の大切さ、まつりや潔斎、祓い、お守りの意義について解説。「私たちは日本人の精神性の高さや、何のために生かされているのかを認識しながら、時に起こってくる災難を祓い、神さまとまつりあいながら守られていく存在でなければいけない」と説いた。

参加者からは「日常を改めて振り返るよい機会となりましたし、心が洗われる思いもしました（二十九歳・一般・女性）」「『生きがい講座』にふさわしい、大切なことを教えていただきました（五十九歳・一般・男性）」などの感想が聞かれた。

東光苑祭典・行事予定

11月

大本開祖大祭遥拝祭
6日（日）午前10時半

東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣り
13日（日）午前10時半

第105回「21世紀、生きがい講座」
講題 生きがいを求めて
講師 森良秀（東京宣教センター次長）
16日（水）午後7時～9時

全国人型おすすめ活動の日
23日（祝・水）

12月

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
11日（日）午前10時半

開祖聖誕祭（175年）
16日（金）午前10時半

第106回「21世紀、生きがい講座」
講題 世界に活動する大本
講師 浅田秋彦（東京宣教センター長）
21日（水）午後7時～9時

全国人型おすすめ活動の日
23日（祝・金）

出口日出麿尊師二十年祭
25日（日）午前10時半